九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

七部よりなる老水夫の歌

コウルリッヂ，テイラー，サミュエル

前川，俊一

https://doi.org/10.15017/2332837

出版情報：文學研究. 59, pp.53-70, 1960-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

七部よりなる

老水夫の歌

サミュエル・テイラー・コウルリッヂ作
前川俊一訳

梗概　さる船赤道を過ぎしより、嵐のため、南極のかた寒き地方に押し流されしこと、それより太平洋の熱帯に針路を取りしこと、起きし不思議の出来事の数々、さては老水夫の故国に帰りしことなど。

I

老水夫ありて
三人の中なる一人をとどむ。
「汝が長き白髪と鋭き眼にかけて
何とてわれをとどむるぞ。

花婿の戸口はあけ放たれ、
われはその最近親なるを。
客人はつどひ、祝宴ははじまる。

聞かずや、かのさんざめきを。」

されど老人は婚礼の客を放たず——
一隻の船ありしが、と語りかく——
「やよ措け、をかしき話もあらば、
舟人よ、われにつき来よ。」

肉落ちし手にてかれ若者をとらへ、
一隻の船ありしが、と語りかく——
「白髪のたわけめ、とく去れかし。
さなくば、わが杖汝を跳らせむ。」

爛々たる眼にてかれ若者をとらふ——
婚礼の客は立ちすくみて

三才の幼児のごとく耳かたむく。
舟人の存念透りぬ。

婚礼の客は石に腰おろして
耳かす外にすべなし。
老翁はかく語り継ぐ、
眼爛爛たるかの舟人は。

船は歓呼に送られ、港をいでて——
われらにぎはしくすぎ行けり、
会堂の下、丘の下、
燈台のいただきの下を。

日は左手にのぼり、
わたつみより出で来りて
照り輝き、右手のかた
わたつみに沈み行きぬ。

日ましに高く、高く、
つひに正午は檣の上に——
婚礼の客はここにて胸打ちぬ、
高らかなる大縦笛の音色に。

薔薇なす頬紅に、
花嫁は広間にあゆみ入りぬ。
会釈しつつ、まへを行くは
にぎやかなる楽人のむれ。

婚礼の客は胸打てど
耳かす外にすべなし。
老翁はかく語り継ぐ、
眼爛爛たるかの舟人は。

聴け、客人よ、嵐と風ぞ、
風とすさまじき颶風
幾日となく、幾週となくわれらを弄び——
船は籾殻のごと飛び行く。

聴け、客人よ、狭霧と雪ぞ、
して、驚くべき寒気いたる。
エメラルドなす緑の氷塊
檣の高さに漂ひすぎ行く。

吹きしきる雪を通して雪の断崖
妖しき輝きを放ち、
人影なく、けだものの姿も見えず——
その間を埋むるは氷のみ。

ここも氷、かしこも氷、
見わたす限りただ氷。
そはひび割れ、唸り、吼え、怒号す——

失神のきはのとどろきのごとく。

遂に一羽の信天翁
濃霧をつきてわたり来る。
われらそを基督者の魂のごとく
神の御名に於て迎へぬ。

舟人等麵麭虫を与ふれば、
そは幾度か円を描きて飛びしが、
雷火のごと、氷は砕け、
舵取りはわれらを導きぬ。

良き南風しりへにおこり、
信天翁あとを慕いていたる。
日毎、餌のため、また戯れに
舟人等の呼声にこたへて来る。

霧の日も、曇り日も、檣に、帆綱に
そは九夜を棲りしが、
よすもがら狭霧煙り、
月しろ白くおぼめきわたる。

「老いたる舟人よ、神汝を救ひたまへ、
汝を苦しむる悪鬼の手より——
汝のその形相は何ぞ」——われ弩もて
信天翁を射しなり。

II

日は右手にのぼり、
わたつみより出で来りて、
ひろきこと旗のごとく、左手のかた
わたつみに沈み行きぬ。

良き南風しりへより吹けど、
良き鳥はあとを慕はず。
餌にも、戯れにも
舟人の声にこたふることなし。

われいまはしき罪を犯しぬ。
そは彼等に災をもたらさむ。
彼等みなちかひぬ、
微風もたらす鳥をわれ殺めぬと。

曇らず、赤からず。大神の頭のごと
燦爛と日はのぼりぬ。
されば彼等みなちかひぬ、わが殺めしは
狭霧もたらす鳥なりしと。
彼等言ひぬ、狭霧もたらす鳥を
殺めしはよしと。

そよ風吹き、白波飛び、
船 跡(ふなあと)軽やかに従ふ。
かの寂莫の海にのり入る
最初(はじめ)のひととわれらなりぬ。

はたと風落ち、帆はたるみて
悲しさ極まりなし、
われらもの言へど、ただに
海の寂莫を破るのみ。

銅色(あかがねいろ)の熱き空に、
血のごとき正午(まひる)の太陽
檣(ほばしら)の真上にかかる、
小さきこと月のごとく。

来る日も、来る日も、
船ひたと止まりぬ、そよとの風もなく。
描きし大洋(おほわだ)に
描きし船のごと。

水いづこにもあれど
船板はなべて縮み、
水いづこにもあれど
一滴ののみ水もなし。

海さへも腐りぬ、嗚呼、わが主よ、
かかること世にあらんとは。
さなり、ぬらめく生物(いきもの)ら足を用ひて
ぬらめく海を這ひすすむ。

夜は死の火(ともしび)
目くるめく舞ひ狂ひ、
魔女の油(あぶら)のごと
緑に、青に、白に 水燃ゆ。

あるは夢中に誓ひぬ、
われらを悩ますは悪霊なりと、
狭霧と雪の国より
九尋の深みに、われらを追ひ来ると。

渇きのきはみ、いづれの舌も
根元にて枯れ、
漸くに出づる声
煤(すす)につまりしがごと。

あな悲し、老いたるも若きも
おそろしき眼してわれを睨(にら)む。
十字架に替へて信天翁
わが首(うなじ)に懸けられぬ。

Ⅲ

われ空に見し
拳の大いさのもの
はじめは小さき斑点のごとく、
やがて霧のごとく、
絶えず動きて、遂に
物影となりぬ。

斑点、霧、やがて物影、
しかもそは刻々に近づき、
水の精を避くるがごとく
躍り跳ね、間切り、転針す。

喉嗄れ、唇は黒ずみ、罅割れて
笑ふを得ず、泣くを得ず、
饑渇に総て黙せる中を、
われ腕をかみて血をすすり、
叫びいでぬ、白帆、白帆と。

喉嗄れ、唇は黒ずみ罅割れし
彼等口あけてわが声をききしが、
見よ、喜びに歯をあらはし
こぞりて息を吸ふさま

ひたぶるに水呑むに似たり。

そは左右に間切らず——
われらを救はんとて
風なく、浮潮もなきに
船首をあげて進みきたる。

西の波間は燃え立ち、
日は暮れなんとす。
西の波間に触れなんとして、
懸るは大いなる燃ゆる日輪。
このとき、われらと日輪の間に
かの妖しき物影、つとすべり入る。

さと日輪に横筋入りぬ、
（上天の聖母恵みをたれたまへ）
そは獄屋の格子ごしに
燃ゆる広き面の覗き見するに似たり。

嗚呼（とわれ思ひぬ、胸とどろかせつつ）
その来るや何ぞかく迅き。
ゆれやまぬ糸遊のごと
日にきらめくは帆影なるか。

覗き見する日輪に格子はめしは

かの船の肋骨なるか。
かの二人こそ乗組みの全員なりや、
かの女と、骸骨のその伴侶と。

彼の骸骨はあまたひび割れありて、
なべてあらはにして黒し。
あらはに、いと黒けれど、湿気と炭粒の
錆びつきしあたりのみ
紫と緑の斑あり。

女の唇は赤く、面に差らひなく、
髪は黄金なす黄に
膚白きこと癩者のごとく
死に似ること伴侶にまさり
その肉しづかなる大気を凍えしむ。

廃船横づけとなりしとき
かの二人賽振りゐたりしが、
「戯は終りぬ、われ勝てり、われ勝てり、」
と女は呼ばはりて、三度口笛す。

一陣の風しりへにおこり
骸骨の間を音して通りすぐ。
目の穴と口の穴を過ぐるは
半ば口笛、半ばうめき声。

海にささやき一つ立てず
幽霊船はさと飛び去りしが、
そのとき東の水際に
三日月さしのぼり、星一つ
その両角の間にひかる。

三日月の光に、一人、また一人
（聴け、客人よ、わが物語を）
断末魔の形相をわれに向け、
眼もてわれを呪へり。

二百をこぞる人々
ため息もうめきもせで、
命なき一塊の、どさと音して
次々に倒れ行きぬ。

その魂魄、天国へ、また地獄へと
現身より飛び去りしが、——
それぞれにわがかたへを過ぐるとき
弩の風切る音を立つ。

Ⅳ

「老いたる舟人よ、われ汝を懼る。

汝が肉落ちし手をおそる。
砂浜の波あとのごと
汝は痩せて背高く、黒ずみたり。

われ汝と汝が鋭き眼と
肉落ちて黒ずみし汝が手をおそる。」
恐るるなゆめ、婚礼の客人よ、
この現身は倒れざりしを。

ひとり、ただひとり、
はてしなき大わたつみに
わが魂は苦しみ喘げど
基督も哀れみ給はず。

うつくしかりしあまたの人々
死に絶えてむくろをならべ、
千万のぬらめく生物
生きつづく——われとともに。

われ腐れ行くわたつみを見て
眼をそらせ、
おぞましき甲板に眼をうつせば、
死人どもたふれ伏したり。

天をあふぎて祈らんとすれど、
祈りの言葉いづるまへに
悪しきささやき聞こえきたり、
わがこころ砂塵と干涸れつ。

瞼を閉ぢてしましをれば、
眼球血脈のごと搏動す、
空とわたつみと、わたつみと空と
疲れしわが眼に重荷のごとく懸り、
死人のむれ脚下に伏せば。

かれらの四肢に冷汗は溶くれど、
腐らず、また臭はず、
かのむれわれを見つめしときの
目つきも失せず。

孤児の呪ひは
天上の魂を地獄にひきおとさむ。
嗚呼されど、死人の眼にやどる
呪ひは更におそろし。
七日七夜われその呪ひをみたりしも、
つひに死するあたはず。

月ゆるやかに空にあがり、
いづこにもとどまらず、
いと静かにのぼり行けり、

かたへに星一つ、二つともなひて——

その光むし暑き海原をあざけりて
朝霜のうちしく如し。
されど、大いなる船影落つるところ、
魔性の海水(みづ)はしづかに、おごそかに
常住赤と燃えゐたり。

船影落つるかなたに
水蛇のむれ
白光の跡引きて動き、
鎌首もたぐれば、妖(あや)しき光
霜のごとはふり落つ。

船影落つるところ、
ゆたけき装ひにて
青に、つややけき緑に、黒ビロードに
とぐろ巻きつつ泳げば、その跡
金色の火ときらめく。

あはれ、めでたき生物(いきもの)らよ、
そのうるはしさ語り得る口はあらじ。
純愛の泉わが心よりほとばしり出で、
われしらずかれらを称へぬ。
守護聖徒われを哀れみ給ひしか、
われしらずかれらを称へぬ。

その刹那われ祈るを得たり。
またわが首(うなじ)よりいとたやすく
信天翁はぬけ落ち、
鉛のごと、海に沈みぬ。

V

嗚呼眠りよ、そは極より極にまで
愛(めで)らるる優しきもの。
聖母メアリは誉むべきかな、
優しき眠りを天より下し
わが魂に入らせ給へば。

甲板に久しく置かれゐたる
うつけし手桶に
露みつと夢みて、
目覚むればしとど雨降る。

唇はぬれ、喉は冷え、
衣(ころも)はぬれそぼちぬ。
夢にわれ正(まさ)しく飲みしが、
現身(うつしみ)はなほも飲みゐたり。

われ動くも手足を感ぜず
いと軽やかのここちして、
眠れるうちに身失せ
浄福のみ魂となりしごとし。

風はいと遠くに吼ゆれど
近づくことなく、
その響もて
枯葉のごとき帆をはためかすのみ。

上空にはかにさわがしく
百千の火の旗ひらめきて
左右に馳せ交ひ、
その間を星のむれ
左右、内外に踊りまはる。

風音高まりて
帆は菅のごとさやぎ、
黒雲より雨ふりそそぎ
その端に月輪かかる。

聴け、聴け、その厚き黒雲裂け
その端に月輪かかる。
嶺より落つる滝つ瀬のごと
稲妻はけはしく広き河となりて
ひまもなくふりそそぐ。

烈風船をおそひて吼え、
石のごと、はたと落ちぬ。
稲妻と月影のもと
死人のむれはうめきぬ。

彼等うめき、たじろぎ、起き上れど、
もの言はず、眼うごかず。
夢にすら、死人の群の
起くるを見るは奇しきものを。

舵取りは舵を操り、船は進めど、
そよ風のそよぎだになし。
舟人ら持場につきて
こぞりて綱をたぐりはじむ。
操りのごと手足をあげ——
われらおぞましきともどちにこそ。

わが兄の子の屍
われと膝つき合はせ、
屍とわれと一つ綱を引きしが、
かれわれに一語を発せず——
われは己が声音を思ひて
おそろしさに戦慄す。

白々と夜明くれば——彼等腕を下し
櫓のへにつどひしが、
妙音おもむろに口より湧きおこり、
亡軀を離れ去りぬ。

妙音とりどりにあたりをめぐり
やがて日に向ひて飛び去りしが、
またおもむろにたちかへり
かたみに交りあへり。

時に雲雀の歌声
空より落ち来たり、
時に、生きとし生ける小鳥
妙なるさへずりもて
わたつみと空をうづむるごとし。

そは時に百千の鳴りものの如く、
時に一管の笛のごとく、
時に天界を黙さしむる
天使の歌声のごとし。

歌はやみぬ。されど帆は
正午まで楽しき音をやめず。
そは夜もすがら眠れる森に

静かなる調べかなづる
水無月の繁き葉蔭の
隠れ水のささやきのごとし。

聴け、おう聴け、婚礼の客人よ。
「舟人よ、汝が存念透れり。
汝が眼よりいづるもの
わが身心を鎮まらしむ。」

およそ女人の生みし男に
かく悲しき話語られしことなし。
客人よ、あしたに汝目覚めんとき
よりまじめにて、より賢き人ならむ。

およそ女人の生みし男によりて
かく悲しき話聞かれしことなし。
もとのごと黙々と
舟人ら持場にかへりぬ。

舟人ら綱引きそめしも
われを見やることなし。
われ思ひぬ、われ淡きこと大気の如きか——
彼等われを見得ざるかと。

午時までわれら黙々と進みしも

そよ風はそよがず。
おもむろにかつ静やかに
船は船底より推されて進みぬ。

竜骨のもと九尋の深みに
狭霧と雪の国の霊ひそみゐぬ。
船推しすすめしは
この霊にこそ。
正午に帆の調べ消え、
船またはたととまりぬ。

日は檣の真上にありて
船を洋上に縫ひとめしが、
やがて船は動きそめぬ、
短く、安らひなき揺れとともに、
船の半ばの長さを、前に後に、
短く、安らひなき揺れとともに。

さて船は、放たれし奔馬のごと
にはかに躍り跳ね、
ために、頭血たぎりて
われ倒れざま、気失せぬ。

かくて幾時を経しか
さだかならねど、

うつつ心かへるに先立ち
虚空に二つの声をきき、
そをわが魂のうちに弁へぬ。

一の声言ふ、「こは彼なるか、かの男なるか。
十字架の主にかけて誓ふ、
かれむごくも弩もて
罪なき信天翁を殺めぬ。

狭霧と雪の国にひとり住む霊
かの鳥を愛で、
その鳥かの男を愛でしも、
かれ弩もてその鳥を殺めしなり。」

二の声はやさしき声、
甘露のごとくやさしき声。
曰く、この男苦行を遂げぬ。
こののちも苦行を為さむ、と。

VI

一の声．
「されど語れ、再び語れ、
汝がやさしき返答新たに——
そも如何なれば船かく迅く進むや、

わたつみは何をなすや。」

二の声
「主人のまへの奴婢のごとく
わたつみ静まりて風は吹かず。
その大いなる輝く眼いとしづかに
月に向ひて——

いづち行かむか問ふものの如し、
凪にも荒天にも月かれを導けば。
見よ、兄弟よ、如何にやさしき眼もて
月かれを見下しゐるかを。」

一の声
「されど、波風なきに
いかで船かく迅く進むや。」

二の声
「前方の大気は切り劈かれ、
背後に閉づるなり。

飛べよ、兄弟、高く、高く。
さなくば、われら遅れをとらむ。
かの舟人正気にかへらむとき、
船おもむろに進むべければ。」

目覚むれば、船は穏かなる日のごと
進みゐたり。夜なりき、
静かなる夜にして、月高く、
死人どもならび立てり。

彼等こぞりて甲板にならび立つさま
納骨堂にいとふさはし。
動かぬ眼、われに向け、
その眼月影にきらめく。

彼等こと切れしときの苦しみと呪ひは
いまに消えず。
われおのが目を彼等の目より外らし得ず、
また目をあげて祈るを得ず。

程なくして呪力断たれ
われ眼を動かすを得たり。
われ遠くを見やりしも
見ゆべきものは見えず。

淋しき道を
恐れをののきつつ辿るひと、
頭をめぐらして後、歩みをつづけ、
またふりかへることなきがごと、

おそろしき魔物
あとつけ来ると知るが故に。

やがてそよ風おとづれしが、
音せず、動きなし。
そは海原を通らざれば、
ささ波も立たず、影もつくらず。

そは春の牧場風のごとく
わが髪をなぶり、わが頬を扇ぐ——
そは妖しくもわが恐れと入り交れど、
われを喜び迎ふるに似たり。

迅く迅く船は走れど
船足はやすけし。
そよ風いとさやかに——
われにのみ吹く。

嗚呼、わが目にするは
かの燈台の頂なるか。
こはかの丘、こはかの会堂なるか。
こはまことわが故郷なりや。

船は港外にただよひ、
われ咽びつつ祈りぬ——

「おう神よ、われを目覚めしめ給へ、
さなくば永久に眠らしめ給へ」と。

入江は玻璃のごと冴えて
いと滑らかに、
入江に月光照りはえ、
月影うつる。

月光の入江おしなべて白し。
やがて影なるあまたの姿
かがり火の影のごとくに
入江より立ち現れぬ。

舳よりわづかを隔てて
この赤く、暗き物影立ち並びしが、
やがてわが肉身も
赤く照り映ゆるに気付きぬ。

われ怖ぢ恐れてかへり見すれば、
こはいかに
かの亡軀のむれすすみ出でて、
檣のまへに立ちゐたり。

彼等こはばりし右手をあげ、
しかと真直にあげゐたりしが、

その右手いづれも篝火のごとく燃ゆ、
真直にささげ持つ篝火のごとく。
彼等の眼、赤くいぶる火影に
石のごとく光りつづく。

われ祈りて、頭をそらせ
まへのごと他見をすれば、
入江にそよ風なく
岸辺に波は立たず。

岩は明るく照りはえ、その上なる
会堂も照りはゆ。
月光は静かに
動かぬ風見をひたしゐたり。

入江は静けき光に白く、
やがて影なるあまたの姿
入江より立ち現はれ、
深紅の装して来りぬ。

舳よりわづかを隔てて
深紅の物影は立てり。
われ甲板に目をやれば——
おう基督よ、われそこに何を見しか。
亡軀はそれぞれに力なく伏し、

見よ、
全身ひかり輝く天使のごとき人
一々の亡軀のかたへに立てり。

そが天使の群それぞれに手まねぎす。
そはこの世ならぬ眺めにこそ。
かれら合図に陸に向ひて立ちぬ、
それぞれに妙なる光となりて。

そが天使の群それぞれに手まねぎす。
ひとことも物言はで——
物言はねど、嗚呼、その沈黙は
楽のごとわが心に泌み入りぬ。

やがてわれ水打つ櫂音をきき、
舵取りの呼び声を耳にす。
不図 頭 めぐらせば
艀 あらはれぬ。

このとき、かの妙なる光失せ、
亡軀のむれまたも身をおこし、
足どり静かにおぞましきともどち
おのおの持場に戻りきたる。
風は動きも、影もつくらず、
われにのみ吹く。

われ舵取りとその童(わらべ)の
いそぎ来る物音をききしが、
嗚呼、わが主よ、そは
死人(しびと)も滅し得ざる喜びなりき。

われ更に一人を見——その声を耳にす。
そはかの善き隠者にこそ。
かれ森にて作れる聖(きよ)き歌を
高らかに歌へり。
かれわが魂のざんげを聴かむ、
信天翁の血を浄(きよ)めくれむ。

Ⅶ

この善き隠者は、海に向ひて
坂をなせる森に住まひ、
いとよき声もて高らかに歌ふ。
かれ遠国より来れる
舟人と語るを好めり。

かれ朝(あした)に、昼に、夕にひざまづくも——
ふくよかなるしとね持てり。
そは柏の老木の朽ちし切株を
蔽ひつくせる苔にこそ。

艀(はしけ)は近づき、われ彼等の語るをききぬ。
「こはげにいぶかし。
いましがた合図をなせる
あまたの妙(たへ)なる光、いづち行きけむ。」

「まことといぶかし、」隠者は言ひぬ——
「彼等われらが呼び声にいらへず。
舟板はひずみ、見よ、帆は
うすくして枯葉のごとし。
われ、かくの如きを
見しことあらず、

きづたの茂みに雪降り積り、
雌狼の子を食らう狼に向ひて
梟の木鳴くとき、
森の小川をゆるやかに流れ行く、
枯葉の残骸を措(おき)て。」

「あはれ、こは悪鬼のすがたよ——」
(舵取りはいらへぬ)
「あなおそろし。」「漕げよ、漕げよ。」
いそいそと隠者は告げぬ。
艀(はしけ)は船に近づけど
われはもの言はず、身じろがず。

艀(はしけ)船下にせまれば
忽然として物音おこる。

そは水底(みなそこ)にとどろきわたり
刻々にいや高く、いや恐ろしく、
船にとどき、入江を引き裂き、
船鉛(なまり)のごと沈み行きぬ。

空と海をとよもす
高く恐ろしき音に気(き)失せ、
七日水漬(みづ)かる水死人のごと
わがからだ浮きただよひしが、
夢のごとすみやかに
舵取りの艀(はしけ)に救ひとられぬ。

船沈みしへに、渦まきおこり
艀(はしけ)は舞ひに舞へど、
あたり静けし、
こだまする丘をのぞきて。

われ唇を動かせば、舵取りは
　　わと叫びさま
ひきつけにはたと倒れぬ。
信深き隠者は目をあげて
坐りしままに祈りささげぬ。

われ擢とれば、舵取りの童(わらべ)
いまや気ふれて
ひたぶるに高笑ひ、その間
かなたこなたに眼をはせぬ。
「は、は、」とかれ言ひぬ、「われ心得つ、
悪魔も漕ぐすべ知れるを。」

われいま故郷(ふるさと)の
ゆるぎなき大地に立ちぬ。
隠者は艀(はしけ)より足ふみ出でて
からくも立ち得つ。

「聖(ひじり)の君、わがざんげをききたまへ。」
隠者は眉をひそめぬ——
「とく語れ、そもいましは
如何なる人ぞ。」

たちまち、おそろしの苦悶(なやみ)に
身はねじまがり、
話始めでは得もゐられず。
語り終へて、身安らぎぬ。

それより、時を定めず、
繁く、はた稀に

かの苦悶われを襲ひ来て
おぞましき身の浮沈を語らしむ。

われ夜のごと国々を過ぎ行けど、
不思議の話才そなはりて、
面見し刹那に
耳傾くべき人を悟り、
わが話きかすにぞ。

戸口よりもれ来る声のにぎはしさよ。
婚礼の客等そこにをれど、
庭のあづまやに、花嫁と
侍き女ら歌ひつつあり。
聴け、かすかなる夕の鐘
われを祈りにいざなふを。

嗚呼、婚礼の客人よ、この魂は
はてしなきわたつみに独りゐて、
淋しさの極み、神さへも
ゐまさざるがごと思ひき。

嗚呼、婚礼のうたげよりも
われにとり、遙かたのしきは
よき友どち打連れて
教会にまうづることぞ。

打連れて教会にまうで、
それぞれにおほい父のみまへにぬかづき、
としよりも、おさな児も、
　　愛する友どちも
若者も、心浮く乙女子も
もろともに祈らむことぞ。

さらば、さらば。されどわれ、
婚礼の客人よ、このことを汝に告げむ。
人をも、鳥をも、けだものをも
よく愛する人ぞよく祈るなる。

なべて、大いなるものをも、
　　ささやかなるものをも、
よく愛する者ぞよく祈るなる。
われらを愛したまふなつかしの神は
すべてを造り、愛したまへば。

眼爛々として
老の身に髯白き舟人は
去りぬ。今かの婚礼の客は
花婿の戸口よりくびすかへしつ。

かれ魂消たれ

うつつ失せし者のごと立去りしが、
あくる朝起きいでしときは
より真面目にて賢き人となりゐたり。

後　記

これは一七九八年出版「リリカル・バラッヅ」初版所載の The Rime of the Ancyrent Marinere in Seven Parts を訳出したものである。執筆にあたって、斎藤勇先生の「英詩鑑賞」に教へを受けるところが多かった。記して厚く感謝の意を表したい。

（一九五九、九、一〇）